研究論文

附属幼稚園実習の可能性（3）

小田　進一

（2011年1月21日受稿）

抄録：　短期大学学生による、北海道文教大学短期大学附属幼稚園における初めての学外実習は、主として観察を中心に行われる。学生は保育に参加せず、幼稚園児と直接深くかかわることがない。このため、学生にとってこの実習が、必ずしも意味のあるものと感じにくい。附属幼稚園における実習が学生にとって有意義であるための諸相を、検討する。学生を受け入れる幼稚園の学生にとっての可能性を学生の実感や意識を基に探るものである。

Ⅰ　はじめに

入学の早い時期に保育の現場を見学し、その後の学習意欲喚起を目的に取り組んでいる１年次の附属幼稚園における観察実習が、生活体験に乏しく、子どもと触れた経験の少ない今日の学生の実態に沿ったものなのか、学生の実情に応じた学習になっているのか、学生の保育職に取り組む意識を高めることにかかわる内容になっているのかの課題意識により取り組んでいる研究の３報である　これまでは、５月６月という入学間もない時期にもかかわらず学びの実感を記録に認めたことをその実習日誌の記述を考察し附属幼稚園における意図的な指導内容と学生が実感した積極的、又は自己肯定的な学びとの関係を探ることにより、附属幼稚園での良い印象=プラスの学びが、以後の学習意欲への良い影響を与えるものであったとの印象を得た。この研究開始時に学生を附属幼稚園において直接指導してきた附属幼稚園主任教諭が、短期大学部非常勤講師として「幼稚園教育実習の研究」担当することになったことにより、これまでの附属幼稚園での指導内容と本短期大学部授業のすり合わせを図った内容の考察と合わせて、学生の学びの実感を日誌の検討結果より抽出した、１「観察の意義と学びの実感」、２「援助者としての教師、教えながら教える保育」３「子ども受容」の３項目について学生の意識を調査し、以下の仮設を得た。

1　附属幼稚における実習を熟知した教員のよる、短期大学部の授業としての取り組みは、学生の実習参加意欲に良い影響を与えたと考えられる。
2　観察実習の意味理解が高まることにより、学生の保育理解や子ども理解が広がる。
3　学生個々への丁寧な情的なかかわりにより、学生の実習を通しての自己変革意識を促すことができる。

前回の調査項目中で附属幼稚園実習を終えて、特にアピールしたい内容として、「観察実習についての学び」を上げるものが一番多かった。・観察することの良さが分かった（保育者と子どもの関係に気づきやすい）･観察のみの実習の良さ（客観的な観察の重要性）・メモの危険性（集中するとよい場面を見逃す）・観察の要点や疑問をもって望むことの大切さ、見たものを表現することの難しさと大切さ、一人ひとりをよく見てわかるのも困難などである。実習の枠組みと学生の学びの実感がどのようにかかわっているか探ることにより、取り組みや授業・指導の現状が把握されると考え本研究は、観察実習についての理解が２年時

北海道文教大学短期大学部幼児保育学科

の附属幼稚園実習や幼稚園教育実習の成否につながるか、また幼稚園教育実習に関する授業と附属幼稚園での指導を学生がどうとらえているのかを検討するものである。

Ⅱ　研究の目的と方法

2009年入学生40名を対象とし、質問紙による調査をおこなった。1年時附属幼稚園実習終了時に「観察実習を理解したか」を中心としたもの、併せて、２年時幼稚園教育実習終了後に「附属幼稚園における観察実習はその後の実習に役に立ったか」について調査し、縦断的に取り組むことによる学生の実習に対する効力感とその要因を探るものである。１年時は、2009年12月、２年時は2010年12月に行った。

１年時には、附属幼稚園実習後の観察実習についての理解について、実習を経てどう感じているかを探ると同時に、短期大学における授業での学びと附属幼稚園における教員よりの指導を同じ質問項目で問うものである。２年時については、その幼稚園実習の体験が、学外の幼稚園教育実習に行かされるものであったかの印象を問うものである。附属幼稚園での経験と短期大学における授業を主として同様の項目で問い、学生にとって望ましい学習環境作りのために附属幼稚園に何ができるかを探ろうとしたものである。

Ⅲ　調査結果と考察

１年時調査対象40名　回収39

２年次調査対象33名　回収22

1　観察実習についての理解と手ごたえ

附属幼稚園実習を終えての学生の印象（表１）から、直接幼児に関わることのない観察実習中心の実習であることは全員が、理解していたことが分かる。

また、観察のポイントなどもほぼ理解して取り組んでいると応えている。かって「子どもに触れる」ことに期待する学生が多く、観察中心の附属幼稚園実習に意味を不満が多かった（「幼児教育学科学生の初期実習」1999）ことからは、改善が図られつつあるといってよいであろう。学生に対する実習に向けての動機付けと実習中の指導援助がある程度有効だったことがうかがわれる。しかし、観察中心であることや期間が４日間と短いことなどにより、学生が傍観者的になりやすい傾向があるのも事実といえよう。観察者として参加に充実感や喜びを感ずることができたのは約60％、心を揺さぶられる感動体験を得たと表現できているのは約半数にとどまっている。前々回の研究において、実習日誌の記入内容を検討した際には、「意欲が喚起された」「子どもたちは本当に純粋で観察していると気持ちが暖かくなり、自然と笑顔がこぼれた」などの記述が多く見られたたが、実際には自己の体験として当事者的に受け止められるのはこの程度ということであろうか。

表１　実習後の実感

	肯定的	否定的	
観察実習の意味理解	39	0	100
記録・日誌の記入の方法理解	36	3	92
観察のポイント理解	34	5	87
観察することで喜びを得ること	24	15	62
感動的体験	20	19	52

学生の手ごたえとして表現された「観察をすることで喜びを感じた内容」(表２)では一番多くは、こどもの姿や子ども像の発見ともいえるもので、「予測できない子ども」「成長する姿」が挙げられている。子どもと共に居ることの良さ「普段のこどもの姿」や楽しそうな様子に触れたことは同じ子どもの様子を上げていても少し異なるだろう。園の体制や保育者への関心（保育やと子どもとの関係など）が続き、自分自身の気づきや実務に関することが挙げられていた。

表２　観察をすることで喜びを感じた内容

1・子どもたちの助け合いの姿（2）・子どもの行動の意味がわかった（2）・思いやる姿（2） ・予測できない子どもの姿・自ら行動する子どもの姿・成長の姿に触れた（4） ・幼児の一生懸命の姿 2・普段の生活の様子（3）・子どもの遊ぶ姿に夢が膨らんだ（2） 3・縦割り保育（2）・保育者の技術（言葉がけ・絵本）・保育者と子どもに信頼関係（3） ・子どもの視点保育者の視点（2） 4・観察することで気づけた（2）・日誌の記入（2）

同じく、感動体験においても、子ども同士や関わりの中で育つ子どもに約黙したものが多い。次いで「できなかったことができた瞬間」のような個々の子どもの姿。保育者の姿はあまり出てこない。

「子どもに優しくされた」実習生自身への関わりも挙げられている。（表３）

表３　感動体験

1・けんかの仲裁をする子どもの姿・助け合う子どもたち（5）注意し合う子どもの姿 ・責任を持って仕事をする園児の姿・思っていた以上にしっかりしていた（2） 2・素直に謝る園児の姿・自己主張のできなかった子が遊具の取り合いをしている場面 ・できなかったことができた瞬間・苦手なものを一所懸命に食べる姿 3・保育者の園児への話 4・子どもに優しく受け入れられた（4）

表４　「観察実習」を短大での授業でどう学んだか

	肯定的回答	否定的	
観察実習の意味について	39	0	
記録･日誌の記入について	35	4	90
観察のポイントについて	32	7	82
観察することで喜びを得られること	33	6	85
感動的な体験に出会えるということ	34	5	87
附属幼稚園実習への期待が持てましたか	33	6	85

表５　附属幼稚園での教員からの指導

	肯定的回答	否定的	
観察実習の意味について	34	5	87
記録･日誌の記入について	33	6	85
観察のポイントについて	32	7	82
観察することで喜びを得られること	33	6	85
観察実習における感動的な体験	32	7	82
実習への意欲喚起	39	0	

2 「観察実習」についての学び

附属幼稚園と短大の実習担当者とのする合わせによる取り組みで、学生自身におおむね理解されていることが、実際に短大における講義や実習中の附属幼稚園教諭による指導の協働が図られたかの課題で、ほぼ同様の項目で学生の意向を聞いた。（表４、表５）　多少のばらつきはあるがほぼ同じように肯定的な答えの傾向であった。

参考に、実習の指導の内容を以下に再掲する。

1　実習の内容　　基本的には、子どもとは関わらない観衆者的観察による観察実習を行い、その観察に基づき、日誌の記入を行う。

2　観察実習の意義　　援助者として保育を行うには、観察は必要不可欠な要素であり、また、観察に徹することができるこの実習は、学生としても、保育者としても数少ない貴重な機会であることなどを認識し、この実習での観察の経験が、2年次の学外実習や卒業後保育者として保育を行う際「常に観察者である保育者」であるための基礎的な力の土台へと繋がっていくことを認識する。

3　附属幼稚園での観察実習についての具体的方法

(1) 観察のしかた

①活動の妨げとならないよう、子どもたちの動線に配慮した場所で観察し、子どもたちの生活空間の雰囲気を大切にするため、実習生自身の雰囲気、存在感、圧迫感などにも、充分に配慮する。

②子どもからの実習生への関わりには、必要最小限の受容はあり得るが、実習生から子どもへの関わりは一切行わない（けんかなどのトラブルの場合も、観察者に徹する。ただし、危険が伴う場合は例外である）。

③できるだけ視野を広くとれるように、可能な範囲で実習生自身の観察位置、体の向きなども工夫する。観察者の立場でありつつも、将来、保育者としてその空間にいる際のイメージを持ちながら観察を行うようにする。

(2) 観察のポイント

①表面的な観察（子どもや保育者が何をしているのかなど）から、それがどのように行われているのか、子どもや保育者の姿から、それが何を意味するのか、保育において大切なことは何かなど、一歩踏み込んで、考えながら、観察を深めていくようにする。

②観察になれてきたら、目の前で展開されていることを追うのみではなく、ねらいを設定し、意識的な観察も行ってみる。（例～保育者の援助のタイミングや具体的言葉かけについて学ぶ）

③観察のポイントの具体例

ⅰ日常生活の場面・日常生活にはどのような活動があり、それぞれの発達段階に応じ、保育者はどのような援助をしているか。

ⅱ自由活動の場面・活動のための環境構成はどのようになされているのか。

・子どもたちは、どのように活動を選択し、取り組み、終了するのか。

・一人ひとりの活動に対し、保育者はどのように援助しているか。

・トラブルの場面で、保育者はそれぞれどのように受容し、対応しているか。

ⅲクラスまたは学年毎の活動の場面

・子どもの興味・関心を高めるために、どのような工夫がなされているのか。

・子どもの個人差にはどのように対応しているのか。

・各年齢段階での発達の差をどうとらえ、援助しているのか。

「観察実習」の理解が学生たちに図られていることを、実習後の実感、短大の授業、幼稚園での指導を比較してみる（表６）と、観察実習について、短大での授業でもよく意味もわかったので全員が実習でもそのように出来たということだろう。「記録」「実習ポイント」については授業や指導ではわかりにくい面もあったが、やり終えたのちには成就感を感じているということであろう。

特筆すべきは、「喜び」や「感動体験」については、授業や指導では理解できたように思えたが、いざ実習では、思うようには体験できなかった。ということなのだろう。体験的学びである実習の要点がここにある。附属幼稚園における初期実習の枠組みによる限界がここにあるのかもしれない。短大の授業による附属幼稚園実習への期待が高められ、附属幼稚園実習がその後の実習の意欲を喚起されていることが学生の印象として表現されていることは望ましい。

表６「観察実習」についての「事後」「授業」「指導」の比較

	実習後の実感	短大の授業	幼稚園の指導
観察実習の意味理解	**39（100）**	**39（100）**	34（87）
記録・日誌の記入の方法理解	36（92）	35（90）	33（85）
観察のポイント理解	34（87）	32（82）	32（82）
観察することで喜びを得ること	24（62）	33（85）	33（85）
感動的体験	20（52）	34（87）	32（82）
附属幼稚園実習への期待		33（85）	
その後の実習への意欲喚起			**39（100）**

3　すべての実習を終えての学生の印象

附属幼稚園実習及び「幼稚園教育実習の研究」などの体験が実習の際に役に立ったかの問いには、ほぼ全員が肯定的であった。

その具体的な内容だが、ほぼどの項目も大きな差は認められない。しかし、比較的にみると「観察の意味理解」や「観察のポイント」などを中心に授業の効力感を表しているようだ。

表７　すべての実習終了後の学生の印象

幼稚園教育実習で	肯定	否定
附属幼稚園における観察実習が役立ったか	20	2
幼稚園教育実習で実習研究の授業が役に立ったか	20	2

表８　効力感の比較

学外幼稚園教育実習に役立った項目	附属幼稚園実習	実習研究の授業
子どもを観察する意味理解	7	13
観察するかポイント理解	9	12
記録・日誌の記入方法の理解	9	8
子どもとの体験	10	11
その他	2	3

附属幼稚園での直接指導では、表９のように、ここでは直接的なかかわりに関する体験や役割に関することがあげられている。

実習を終えてから改めて、学んでおきたかったこと（表10）では、附属幼稚園の実習をもっと長くすることや部分実習体験があげられている。

表９　教員からの直接指導で幼稚園実習に役に立ったこと

･子どもに対する接し方考え方･子どものエピソードを聞いた･手遊びや集団遊び･けんかの対応･障害の子の生活
･保育環境に中での保育者の位置･掃除の仕方（4）
･日誌や記録のとり方（3）

表 10　あればよかった指導内容

・障害児について（2）
・附属幼稚園実習をより多く
・附属幼稚園での部分実習
・手遊び（2）

Ⅲ　まとめ

学生自身が手ごたえを感ずることのできる体験的学びの実現に向けて、附属幼稚園実習ができることを検討してきた。本学における附属幼稚園実習は、「一番初めの実習」「１学年（当初約130名）が全員が班編成にて参加」「４日間」という特徴がある。観察実習というキーワードもこの枠組みの影響を大きく受けている。しかし、本研究とそれに合わせた短期大学実習研究授業担当者と附属幼稚園担当者との連携による取り組みにより、観察を中心にした実習であることに対する学生の拒否意識はなくなり、また本来の子どもへのまなざし(観察のポイント)を学ぶことへの理解も深まっていったように思われる。学生自身の体験が実感の伴った学びとして、附属幼稚園実習において実現するには限界がある。しかし、あくまで学生たちの初期実習として、所与の枠組みを甘受し、その中から授業担当者と共同することにより、学生のその後の実習に大きな影響後与えることになるとの示唆を与えられた。

同じ学生の２年間を縦断的に意識調査することにより、多面的な検討が可能であったが、狭い範囲での取り組みになってしまった。また、２年目は、諸般の事情でサンプル数が少なく、調査の妥当性を著しく欠く結果となった。

短期大学部が改組することにより、短期大学生の初期実習は附属幼稚園にはなくなる。今後、教育実習及びインターン等の受け入れを図り、学生の課題意識の明確化を図り、「観察と生活が一体となった体験的学び」の実現に向けて取り組むとともに、学習と体験との位置関係、縦断的な研究に取り組みたい。

文献

1)　大滝まり子、小田進一：幼児教育学科学生の初期実習、北海道文教短期大学研究紀要、23、1999
2)　小田進一、高橋雅子：附属幼稚園実習野の可能性、北海道文教短期大学研究紀要、31、2007
3)　小田進一、高橋雅子：附属幼稚園実習の可能性（2)、北海道文教大学研究紀要、33、2009
4)　河邉貴子、鈴木隆編著：保育・教育実習、フィールドで学ぼう、同文書院、2006
5)　相馬和子、中田カヨ子編：幼稚園・保育所実習、実習日誌の書き方、萌文書林、2004
6)　秋田喜代美他：教師の様々な役割、チャイルド社、2001
7)　相良敦子、池田政純、則子著：子どもは動きながら学ぶ、環境による教育のポイント、講談社、1990

Future Possibilities of Hokkaido Bunkyo College's Kindergarten Observation（3）

ODA Shinichi

Abstract: Before commencing their specialized study, our students observe the classroom activities of Hokkaido Bunkyo College's kindergarten. The students do not participate in the lesson and they are not directly involved with the kindergarten students. Because of this, the students do not feel that this class observation is a good experience. Due to the introduction of the college students to the classroom, the kindergarten teachers have changed their methods for including the college students. The college students feel that this has greatly improved the observation portion of their course. I would now like to discuss further the possibilities of these observation periods.